

佐賀偉人伝

平成22年度出版の3冊

かれらは未来を信じた、そして切りひらいた

幕末明治期の激動する日本にあって、たくさんの佐賀人が活躍したことを知っていますか？

幕末の佐賀藩は、いち早く西欧の技術を導入し、大砲や蒸気船の製造、西洋医学の研究など、さまざまな分野において日本最先端を誇りました。明治新政府には多くの人材をおくりだし、新しい時代を築くために奮闘しました。佐賀城本丸歴史館では、幕末明治期に活躍した人物をシリーズで紹介する「佐賀偉人伝」の刊行を開始します。

全15冊予定（毎年度3冊程度×5年間）／A5判・112頁・各1,000円（税込）



岡田三郎助

平成23年3月刊

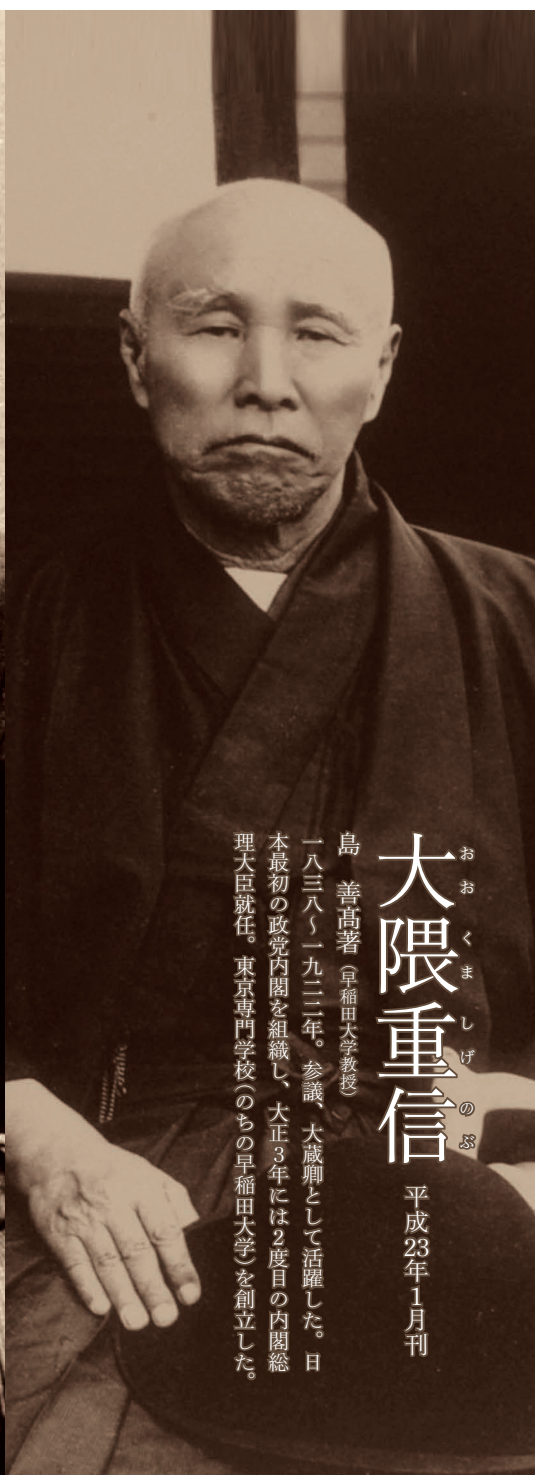
松本誠一著（佐賀県立博物館・美術館副館長）
一八六九～一九四四年。白馬会の創立に参加。フランスに留学してラファエル・コランに師事。東京美術学校（のちの東京藝術大学美術学部）教授。第1回文化勲章受章。



鍋島直正

平成22年11月刊

杉谷昭著（佐賀城本丸歴史館館長）
一八一四～一八七二年。第10代肥前国佐賀藩主、号は閑豊。大砲や蒸気船の製造、西洋医学の研究など、当時の日本で最先端といわれる佐賀藩の近代化を先導した。



大隈重信

平成23年1月刊

島善高著（早稲田大学教授）
一八三八～一九二二年。参議、大蔵卿として活躍した。日本最初の政党内閣を組織し、大正3年には2度目の内閣総理大臣就任。東京専門学校（のちの早稲田大学）を創立した。

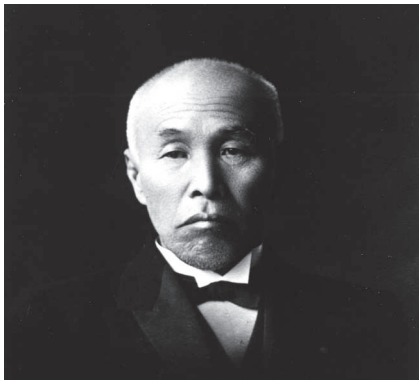
写真提供：佐賀県立美術館



鍋島直正について（副島種臣のことば）

同公は元来^{そのおこな}其行いが正しい人である。……同公は極めて慈悲心深き人で、刑罰の^{ため}に罪人を殺すべきことあるときは^{これ}之が^{ため}に惻然として涙を垂れ、前夜から酒も禁じて居られた。而も単に此一段の慈悲心^{しか}のみに止まらずして、平素領内人民の教化を^{おこ}重んじ^し之を^こ勉められたるが故に、当時佐賀領内には盗賊ちうものは極めて稀^{ゆえ}れにして、死刑あることが大抵十年に一度位に過ぎず、……故に当時佐賀領内は、^{まこと}真に夜雨戸を締めずして寝ると云う位であった。是れ閑叟の徳沢が深く民心に入^こったる結果である。

（「副島伯経歴偶談」〈『副島種臣全集』2著述編Ⅱ〉慧文社）



大隈重信のことば

……人生は川の流^{ごと}れに等しい。少年のさまは流^{ごと}れの源の如く、老人のさまは下流のようである。水が初めて源から出発すると、障害にあえば十丈の瀧になり、けわしい処では奔流となり、留まれば淵となり、急に放すと瀬となり、或いは大きな岩を裂き、或いは大木を越えて、跳るが如く、走るが如く、怒るが如く、笑うが如く、争うが如く、戦うが如く、^{たちま}忽ち分かれ、^{たちま}忽ち結合し、……これは少年が始めて志を立て、世の中に突込んで行く有^{あり}様に似ていないだろうか。……ただ彼らの決心と勇氣とは、世間の心の強い人をたじろがすには充分なものがある。

（『大隈伯昔日譚』早稲田大学出版部）



岡田三郎助のことば

東京白馬会では何等問題にならなかった黒田さんの裸体画が、京都博覧会において突然大問題^{かも}を醸し、ほとんど、撤回されんばかりになったのもこの年であった。……世論は毀誉相半ばし、どちらにしてもその事件を書かなければ新聞も雑誌も時世に遅れたような状態^{てい}を呈したのは、油絵の一般化には多大な効果があったようである。……ただ一種の習慣上、陛下が行幸遊ばされた際、絵を布で一時的に隠したと言うのは今日顧みて甚だ遺憾だとも思われるが、その当時としては致し方も無かった事だろうと考える。

（『美術』第14巻第3号）

A5判・112頁

全15冊予定（毎年度3冊程度×5年間〈平成22～26年度〉）

各1,000円（税込）

▽ご注文はお近くの書店または佐賀城本丸歴史館へ。佐賀城本丸歴史館からの購入で配送をご希望の場合は、別途、送料と振込手数料が必要です。

—佐賀偉人伝—

鍋島直正 を（ ）冊）申し込みます。

大隈重信 を（ ）冊）申し込みます。

岡田三郎助 を（ ）冊）申し込みます。

ご住所（〒 — ）

お名前（フリガナ）

お電話番号 — —

取扱い店名	年	月	日

2010.9.1